
死の魂理学

瓢六玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死の魂理学

【Nコード】

N2943J

【作者名】

瓢六玉

【あらすじ】

人間にとって大問題である「死」について、「魂理学」という新たな領域から考えてみた。「たましい」などという、なにやら胡散臭いと思われるかもしれないが、体でも心でもない「新たな視座」として「死」を考える中心概念にしてみた。現役の心理学科大学院生の奈保子さんに聞き手となっていたら、Q&Aのかたちで漫談調にしてみた。

死んだらどうなるんだろう？

奈保子 さて、さっそくズバリうかがいます（笑）。どうなるんですか先生？

先生 さあ…。どうなるんでしょう（笑）。まだ、死んだことないからわかりません…。

奈保子 それじゃ困ります。もうこの対談、終わっちゃいますよ（笑）。

先生 ハハ…。そりやまずいね。えー。死んだらどうなるんだろう。

まず、意識があるかどうか、ということだろうね。

奈保子 そうですね。

先生 ふつうに考えたら、脳波が停止するんだから、意識はなくなるだろうね。

『精神と物質』という本でノーベル医学賞の利根川博士が断言していましたよ。

「だから…、私は死後の世界はありえないと思います」と。

それから、熟睡しているときは脳波は活動しているけど、夢は別として意識はなくなるでしょ。

奈保子 そうですね。麻酔をしてもなくなりますけど…。

先生 あ、いいところに気がついたね。泥酔してもなくなるかもしれない。

つまり、意識がない状態というのは、死んでいるのとある意味同じことなのかもしれないよ。

奈保子 それじゃ、毎晩、眠るのは死んでいるのと同じなんですね。

先生 そうなんです。ある意味、眠ることは「小さな死」かもしれないんだ。

奈保子　じゃ、「大きな死」もあるんですか？　あ、そっか…。ほんとに死んじゃうことですね。

先生　そう。

あのね、面白い本があるんだよ。

ぜんぜん違う著者なんだけど、片方が『人間死ぬとどうなる』というので、

もう一方が『人間は死んだらこうなるだろう』っていうの。

奈保子　なんだかQ&Aみたいな題名ですね。

先生　そうなんだ。この二冊を読んだら、もう全部答えが分かりそうな気がするけど、

そうは簡単ではないんですね。

それでね、とりあえず「大きな死」と「小さな死」について考えてみましょう。

むかし書いたエッセイから、ちょっと引用してみますね。

「フラクタルという現象、というか、理論をご存知だろうか。

例えば、ヒトの小腸には柔毛（柔突起）という突起が表面にある。

これは、腸内の表面積を大きくして栄養分の吸収効率を高めるための仕組みである。

ところが、この柔毛の先端には、さらに細かな「微柔毛」というものがある。

私は、生物学部生の頃、電子顕微鏡観察で、マウスのそれを実際に撮影したことがある。

その時、この精緻な仕組みと繰り返しのパターンに感心して、

（ひょっとすると微柔毛の先端にもさらに細かい「超微柔毛」なるものが存在しているのではないか…）

と思ったものである。

その後、樹木の生長過程をCGに数式をインプットして描かせるという実験で、フラクタルという概念を知った。

つまり、樹木は法則的に枝分かれしていくと、樹木特有のあの形

状となり、

「全体と部分が相似形をなす」

というのが、私の理解したフラクタル現象である。

そこで、学生の頃、ハツと気づいたのが、もしかして、世界は、宇宙は、フラクタル的な構造をしているのではないか…ということである。

例えば、「死」を例にあげてみると「小さな死」と「大きな死」。「部分的な死」と「全体的な死」…があるのではないか、と考えてみた。

我われが生涯を終えるとき、生物学的には「個体死」ということになる。

しかし、細胞レベルでは、毎日、新陳代謝が行われており、細胞全体で「細胞死」が起きている。

話がやや飛躍するが、我われが夜眠ると、自意識が消失する。そして覚醒すると自意識も戻る。これを「小さな死」と考える民族・部族は多い。つまり、毎朝、生まれて、毎晩、死んでいくのである。

そして、寿命が尽き、個体として死を迎えると自意識が消失するが、それを一晩の眠りと同じく考えてみると、我われは、一定期間の自意識が消失した後に、つまり、大きな眠りについた後に、朝の覚醒とともに自意識が戻るのと同じように、自意識は新たに覚醒するのではないかと、考えた。

そしたら、いつしか死ぬことが、さほど怖くなくなっていた。

どうせ、明日の朝みたいに、また目が覚めるに決まっている…と信じられるから」

奈保子　なんだか、納得です。でも、これは事実とは違うんですよね。

先生　そう。科学的事実ではありません。観察も検証もできませんからね。

仮説のようなものかな。それこそ魂理学的なね。

だいいち、宇宙がフラクタル的な構造をしているとは限らない。

ぜんぜん別なものかもしれないですよ。

奈保子 でも、電子が核のまわりを回転していたり、太陽系の惑星が太陽のまわりを回転していたり、
銀河系そのものが渦巻いて回転している…というのが、単なる偶然の一致というには、

あまりにも似ていますよね。

そしたら、この宇宙もまた何らかの回転をしているんじゃないかと、
考えるのが自然ですよ。

先生 そうだね。実際はビッグバンから始まった膨張は観測されているけど。

回転ではないなあ。

だから、あるとしたら今我われが住んでいるのと別な宇宙と一緒に

どこかを中心として回転しているかもしれないよね。

奈保子 そして、さらにまた別な回転運動が無限にあるんでしょうか…。

なんだか頭がこんがらがっちゃいますね。

先生 そう。思考の限界だね。

奈保子 でも、「小さな死」と「大きな死」があって、

だから自意識のようなものは保存されるのでは…という考

え方は卓見だと思いますよ。

先生 そうかな。でも、昔から宗教の世界では、そんなふうに考えていたと思うよ。

キリストが再生したとか…

仏教の輪廻転生とか…

けっきょくは、そういうことなんじゃないかなあ。

奈保子 なるほど。そうかもしれませぬ。また「わたし」という意識が蘇えるんですものね。

でも、数学や自然界にフラクタル現象があるということが、私たちの意識が続くかもしれない、というひとつの希望に感じられます。

先生 奈保子ちゃんは、またこの世に生まれてきたいの？

奈保子 そうですね。やっぱり、死んだら、まったく自意識が未来永劫なくなってしまう、

と考えるのは、なんだか寂しいような哀しい気がします。

先生 そうだね。それでもいいっていう人もいるけど。

「もう生まれてきたくない…」

と言つて自殺した『美しき少年の理由なき自殺』という本があつたよ。

でも、熟睡しているときと同じく、なーんも意識がなかったら、

それはそれで、何でもないんだよね。痛くも怖くもないでしよ。

奈保子 先生のおっしゃる「大きな死」と「次の誕生」の間は、意識がないんですね。

先生 そうだよ。でも、意識は眠っているから目覚めるまでは何も感じられないんだよね。

だから「死ぬというのは、寝入ることと同じだ」と考えていれば、

毎晩、寝る前に怯える人はいないから、そんなに怖がらなくてもいいんじゃないかな

と思うのね。

奈保子 そういう理屈になりますね。死を怖がる人にとっては救いになる考え方だと思います。

先生 ただし、信じなければダメだけどね。科学的事実ならば知っていることが大切だけど、

魂理学的仮説は信じるしかないんです。

死ぬとき苦しいんだろうか？

奈保子 このことが、死を怖れる最大の要因ですよ。

先生 そうだね。

でも、解剖学者の養老猛司先生がおっしゃっていたけど、「苦しい」と感じている時はまだ生きているからなんだって。そうでしょ。死んだら感覚は喪失するんだから…。

だから、厳密に言うと、死に至る時の傷病苦痛はあるだろうね。

でも、普通の人は、苦痛も極限を超えると意識を失うでしょうね。

私は大学生のとき、盲腸の手術をしたことがあるんだけど、麻酔はしていたけど、腸を引っ張り出したときの痛さは生まれてこの方経験したことのないような激痛だったのね。それで、血圧がドンドン下がって、危うく意識を失いかけたんですよ。

だから、大怪我とか脳溢血や動脈瘤破裂なんかで体内大出血をしたときや、

超激痛になると意識レベルは低下するというのは「神の恩寵」なのかもしれないけど、

うまいことできているなあ…と、思いますよ。

奈保子 そうですね。

先生 それと、最近、臨死体験なんか有名になって、いろんな報告が出てきたでしょ。

その中で、蘇生した人たちが、共通して言うのは、

「何とも言えない法悦感（エクスタシー気分）」とか

「恋愛の極致のような感覚」というような最大級の快感に包まれたというんですね。

大脳生理学的には、側頭葉にシルビウス裂という溝があっ

て、

ここを電極刺激すると同様の快感が起こるそうなんだ。けど、普段は滅多にその感覚は起きないようになっている。

ただし、ドラッグやヨガ訓練や、ランナーズ・ハイのような体験、

そしてセックスなんかで起こる絶頂感はそのに近いんだね。ドーパミンとかの微量な脳内物質が関係していると言われるけど。

非日常的な死ぬ瞬間には、そういう脳内麻薬とか脳内モルフィネと言われる快楽物質が

いっぺんに分泌されるんだと思うんだ。

だから、法悦境の気分になるんでしょうね。

アフリカのサバンナで、ガゼルやインパラという草食動物がライオンに捕らわれて、

喉首を噛まれて窒息死しようとしているときに涙を流しながらも満足気な顔をする、

ということをよく言われるし、そういうビデオも見たことがあるけど、

もしかしたら動物も同じメカニズムなのかもしれないね。

生物学者のライアル・ワトソンは、あらゆるエクスタシー体験は一体感を伴う、

と言っているんですよ。それも「あらゆるものとの一体感」なんですって。

それを、「自我が存在をやめて全体の一部になる感覚」とも表現しているんです。

奈保子 なんとなく解かるような気がします。

あの世はあるのだろうか？

奈保子　それでは次の問題ですが、あの世つてあるんでしょうか？

先生　やっぱりそうきたか（笑）。

奈保子　ちゃんはどう思うの？

奈保子　逆質問はズルイですよ（笑）。

先生　ハハ…。たまにはいいじゃん。

奈保子　私は、どちらかといえば、やっぱり死んだ後も何らかの世界はあつてほしいですね。

先生　どうして？

奈保子　だって、先に死んだおじいちゃんとか親とかに再会できたらいいじゃないですか。

あるいは、先立たれた子とか、恋人とか…。

先生　そうだね。あの世で再会できるんだ、と思えたら、生きていく張りあいができるものね。

他にはない？

奈保子　それと、やっぱり自分が死んだらまったく跡形もなくなるというのはさびしい気がします。

この宇宙のどこにも自分という存在がなくなってしまうことが…。

だから、せめて次元の異なる世界であつてもいいから存在を続けていたい

と思うんじゃないでしょうか。

先生　それは私も同感ですね。でも、中には、もうこの世に未来永劫生まれてきたくないし、

あの世でも存在したくない、っていう人はいますよね。

奈保子　なんだか哀しいですけど、そういう人がいてもいいかもしれません。

でも、あの世があるかどうかということは、どうやって科学的には実証不可能ですね。

これは信じるか信じないかの問題でしょ。私は信じたい派ですけど…。

先生 「小さな死」のところでも言ったけど、フラクタル的にまた生まれてくると信じるならば、

あの世はどんな形かは解らないけど、あってもいいよね。
輪廻転生と思われるようなケースが『生きがいの創造』

という本で

いくつか報告されているけど、著者の飯田先生がうまいこと言っているんだね。

「死後生を信じていた人は、仮にそれがなくても意識できないのなら、

別に困ったことはないが、それを信じていなかった人は、もし死後生があつた場合は狼狽するだろうから、

どっちが徳かと言えば、信じていた方がいい」

と言うのですが、なんだか説得力がありますね。

古くは、スウェーデンボルグという人が、生きながらにして死後の世界を見てきて、

それをまるで旅行記みたいに本にしているんです。

邦訳でも『かい間見た死後の世界』というのがあっておもしろいですよ。

霊界のしくみも書いてありますから。

奈保子
んか？

臨死体験は、あの世の存在を説明したことになりませ

先生

臨死体験そのものは不可思議でもしるい現象だけど、いずれの人も生還して報告したものだから

厳密に死んでいたかどうかはわからないんだ

ね。

蘇生するときに瞬時の脳内イメージを夢と同じく見ている可能性があるから。

さっきも言ったように、ペンフィールドという脳生理学者が

大脳側頭葉のシルヴィウス裂という溝に電極刺激を与えたら、

幽体離脱と同様の現象が起きたという実験結果があるんだ。

つまり、脳内の電気生理的現象として説明できる部分もあるんだね。

奈保子 臨死体験のなかに、現実と同時に離れたところで亡くなっていた肉親と会った

という報告をするケースがありますよね。

ああいうことが起こるといのは、どういう意味があるんでしょうか？

先生 それは科学的にはまったく説明できませんね。

深層心理学的にはシンクロニシティ（共時性）といってよくあることだけど…。

死後生はあるんじゃないか、と信じなくなるケースですよ。ね。

『生きがいの創造』に出てくるたくさんの輪廻転生ではないかと思わせるケースも、

死後生の存在を感じさせますよ。

奈保子 グロフたちが実験でやった退行催眠もある意味では、そうですね。

先生 そうだね。最近では、『前世療法』が有名だけど…。

薬物や特殊な呼吸法で深い催眠状態になると、

自分の意識や記憶にない別の人間の人生が語られて、

しかもそれが実際に歴史的裏付けが証明されるんだけど、

あれも今の科学では説明がつかないね。

あつさり、死後生や転生を認めた方が素直かもしれない。

奈保子

宇宙論的にはどうですか？

先生

最先端の宇宙物理学者や天文学者が言うところによる

と、

我われは、まだ全宇宙の4%しか解かっていないんだつて。

物質とか光で観察できるものはそのていどで、

あとの96%は暗黒物質や暗黒エネルギーというんだ。

よく物質と反物質が会うつと消滅する、というような

ことを聞くけど、

そこから、なんとなく「この世」と「あの世」を連想したりするんだよね。

この世とはちがう物理法則の「あの世」があるんじゃないか…と。

電気でも磁石でも＋と－、NとSというふうに陰陽の

二極化が

宇宙の一つの特徴でもあるでしょ。

引力と斥力もそうだけど。

この二極構造からなんとなく「この世」と「あの世」を

我われは想像するのかもしれないね。

なるほど。つまり、悟性の習慣というわけですね。

奈保子

神様を見たり感じたりできるんだろうか？

奈保子 私は親がクリスチャンなので、いちおうは洗礼を受けているんです。信仰はたいしたことないんですが…（笑）。

でも、宗教系学校で幼稚園から高校まで育ったものですから、やはり、死ぬときはイエス様とマリア様がお迎えに来てくださるんだ…と、心のどこかで信じているんですね。

学校での洗脳かもしれませんが…（笑）。

先生 そーなんだ。じゃ、死ぬのはちつとも怖くない？

奈保子 ンー…。やっぱり、死ぬときに、痛かったり、苦しむんじゃないか、っていうのはちよつと怖いですね。

でも、死んだ後のことはあまり心配したことはありません。

先生 イエス&マリア様がきてくださるから？…。

奈保子 幼児期からのインプリンティング（刷り込み）ですね（笑）。

先生 いえいえ。それは立派な教育の成果ですよ。死後の心配がない人になっちゃうんだから。うらやましいかもよ。私は普通の学校で損した（笑）。

臨死体験をした人の話では、自分がイメージしていた通りの神様の姿を見たという人がけっこういます。

あるいは、興味深いケースで、修道女の方が神そのものではなく「慈愛にみちたものに包まれた」

と報告した例もあります。

臨死体験については、さっきも言ったように、まだ生きていて、脳が活動していると考えると、かなり文化差や個人の抱いているイメージに支配されるようですね。

「三途の川」の存在を信じている人は、そういうイメージを見るけ

ど、あの世との境が「壁」や「トンネル」だと信じている人はそれを見るんだね。

あの世に長く滞在して、神に出遭ったり、神様のもとで働いたという報告例はないものね。

スウェーデンボルグも天使とか指導霊とかは言っているけど、神様がいたとは言ってませんでしたね。

奈保子 つまり、個人の抱くイメージとしての神には会えるかもしれないけど、それは実体としての神ではないと言えそうですね。

先生 神の定義にもよると思うんですよ。神というのが「働き」そのものであれば、必ずしも物質的な存在でなくともいいわけですよ。奈保子 それも悟性の習慣でしょうか。

先生 うん。人間は自分で感じられる範囲でしか知覚できないんだと思うよ。

数学では、5次元以上の多次元だって証明できても、4次元に生きている我われには7次元とか、まったく想像できないでしょ。

虚数の存在だって、それが実世界では何に相当するのか解らないもの。もしかしたら、反物質とか反エネルギーというのがそういうのかもしれないけど、証明はできないし。

奈保子 神様は「実在」として姿を見ることは不可能でも、「はたらき」として感じることはできるんですね。

先生 そうなるね。風そのものは見えないけど、木々を揺らすという「はたらき」を見ることで風の存在を知りうなものかな。

気象学的には、風は質量を持つ空気が気圧差で移動するために起こるんだけどね。

あらゆるエルネギーも不可視だけど、光ったり動いたりする物理的現象で可視になるでしょ。そして、エネルギーの存在は疑いないよね。

宇宙における万物の誕生や消滅も、物質やエネルギーの密度差で生じる「風」と同じようなものかもしれない。

奈保子 そう考えると詩的ですな。

先生　だから、「はたらき」に神を認めるのであれば、なにも死後
でなくとも、生きているうちから毎日、感じられるわけですよ。
奈保子　そうですね。今こうして生きているのも、いつか死ぬのも
不思議だし、神秘ですよね。
宇宙にある「はたらき」は神の存在の証ということになりますね。

死の不安

奈保子　これは馬鹿げているかもしれませんが、本質的な疑問なので聞きます。

そもそも人は、なぜ死を恐れるのでしょうか。

先生　うん。それにはいろんなレベルでの答えがあるんじゃないかなあ。

奈保子　心理学的にもありますか？

先生　例えば、プリミティヴなバース・トラウマとかね。

奈保子　生まれたときの原体験としての不安ですね。

先生　そうです。

胎児にとってはお母さんのおなかの中は暗くて、暖かくて、羊水に浮かびながら酸素や栄養を胎盤からもらうでしょ。

いわば、天国的、極楽的な状況なわけですよ。

奈保子　ですね。それが、出産時には一転して．．．。

先生　そう。母体の陣痛と共に子宮が収縮するわけですよ。胎児を楽園から追い出すために。

奈保子　まるで、エデンの出楽園ですね。

先生　そうなの。

別な例えで言えば、エラ呼吸していた魚を空气中に放り出すようなものですよ。

魚にしてみたら窒息感やら死の恐怖感に襲われるはずですよ。

苦しみ、不安、恐怖の原始的体験ですよ。もっとも、言語獲得以前ですから、

それが知覚化されているかは疑問ですが、それこそ原体験としての恐怖が刻まれるのかもしれない。

奈保子 いわゆる原不安ですね。

先生 そうです。

から。 理屈ぬきの恐ろしい感じ。もっとも、これは仮説です

らね。 胎児や新生児の心理を追体験することは不可能ですか

か。 その原不安が、死に臨むときに喚起されるのではない

 もっとも、それ以前に、人は未知なるもの、
 シミュレートできないものは本能的に不安を感じるの
 でしょうね。 それと予期不安の

ように、何か悪いこと、嫌なことが起きるんじゃないか、

 ということもあるでしょう。さっきも言ったけど、痛
 みがあるんじゃないか、

 とか、苦しむんじゃないか、というような・・・。

奈保子 これまで伺ったお話だけでも、だいぶ死に対する不安は
 軽くなったような気がします。

先生　そりゃよかった。知ることは力ですからね。それと信じることでも大事。

奈保子　死に対する、自分なりの信念というか、考え方、取り組み方が大事なんですね。

先生　そうなんです。「自分の死」に対するファンタジーというか、神話づくりでもいいんです。

奈保子　先生はどんなファンタジーや神話を持っているんですか？

先生　私は「魂の全能性」というのを信じようとしています。いちおう魂理学者ですから。

奈保子　つまり、オールマイティということですか？　具体的にはどんなふうにでしょう。

先生　まずはですね、「魂は永世生き通し」ということです。体は物質ですから消えてなくなるけど、魂そのものは永遠になくならないと信じているんです。

奈保子　じゃ、生まれ変わって、何度も何度も、永遠に生き続けるということですね。

先生　そう。魂永久不滅説。

ユングは錬金術について真面目に深層心理学的に探求したことで有名ですけど、

晩年の著書に「賢者の石」について説明しているのね。それは「始まりも終わりもない永遠に存在する根源の本

質を有する」

と言ってるんだけど、これって魂そのものじゃないかと思っんですよ。

魂は生まれも死にもしない、ってね。ただ存在のあり方だけが変化する。

哲学者の井筒俊彦先生の言い方をすれば、

「存在が花している」とか「存在が奈保子している」とね。

奈保子　そう考えると、なんだかちょっと安心する気がしますね。

先生　そうですね。

次、また生まれてくるんだから、今ここで、そんなに焦らなくともいい。

今、自分がやりたいと思うことを、じっくり味わって体験したらいいんですよ。

魂は、体験を味わうために存在するのかもしれない、と思っているくらいなんです。

奈保子　なるほど．．．。

そうすると、何となく腰がすわるといっか、安心を得るような、

落ち着いて物事にあたれるような気がしますね。

先生　さっき「もう生まれてきたくない」という人には気の毒ですけどね（笑）。

奈保子　でも、魂全能説なら、そういう人は、

生まれることを選択しなくていいことにもなりますね。

先生

なるほど……。それもあり、かもしれませんね。

もつとも、あつちの世界に戻ったら、考えも変わるかもしれないしね。

ときに、

それと、魂全能説を考えついたのはね、父親が死んだ
その魂はこれから更なる進化をすべくまたこの世に戻っ
てくるんだろうな、

と思ったんだけど、それじゃ、自分がいつか死ぬときに
出会う父の魂というのは

あるんだろうか、と疑問が生じたんですよ。

奈保子

あー。そうですね。そう言われれば……。

先生

でも、ズルイ考えだけど、魂がオールマイティで、な
んでもありだったら、

両方可能なんだよね。

つまり、個別の進化する父の魂と、死んだときに会いに
きてくれる魂の両方が

モチみたいにわかれていてもいいんですよ。時空の同時
性という拘束を受けなくとも。

ひとつのモチを二分しても同じ味がするでしょ。言っ
てること解かる？

奈保子

はい。なんとなく、解かります。

魂も、もともと全能の神の一部だとしたら、
神の全能性を有しているわけですから、なんでも出来る

ことになりますものね。

先生 そういうことです。

もつとも、臨死体験などで先に亡くなった親しい人に会うという体験は、

自分の魂が作り上げたイメージである場合も考えられるけどね。

だって、死んだ親父がよく夢に出てくるんですよ。

それは、自分が親父というイメージを人格化してビジュアルाइズしているわけだからね。

奈保子 でも、そう考えるよりも、やっぱり本物の肉親なり知人の魂が

会いにきてくれると思ったほうが私は嬉しいですね。

先生 そりゃ、そうさ。私だってそっちのほうがいいよ。

だから、そっちを信じることにしています。

人生は味わうためにある

奈保子 先ほど、輪廻のはなしが出ましたが、何度も生まれ変わるのには、

何か目的論的な意味があるのでしょうか。

先生 私もそれを疑問に思ったことがあるんですけど、ウォルシュという人の『神へ帰る』というのを読んでいたら、

あらゆる可能性のある閉じたファイルのなかを無限の組み合わせで

自分が選んで何度も一生を体験するといふんだね。

奈保子 ちよつと、イメージしにくいんですが…。

先生 だろうね。この人は『神との対話』というシリーズを何冊か書いていて、

そこにも出てくるんだけど…。

今、ゲームのCD-ROMがあるとするでしょ。

そして、私がそのゲームをやるとして、何度かやっても前とまったく

同じプロセスはたどりませんね。似てはいるけど、所々、微妙に違うはずでしょ。

奈保子 はい。

先生 しかし、ゲームそのものは閉じたファイルであるCD-ROMのなかに

初めからすべて書き込まれているよね。

奈保子 そうですね。

先生 でも、何度やっても微妙に展開は変わってくる。

麻雀ゲームでも、対戦ゲームでも、ロールプレイング

でもそうなると思うんだ。

奈保子　なるほど。でも、魂全能説としたら、何だか閉鎖的で一面的すぎる感じがするんですが…。

先生　CD-ROM一枚がゲームだとすると、そんなふうに感じるね。

ところが、そのCD-ROMの中にはあらゆるゲームが揃っていると思うのですか。

奈保子　あ、無限の可能性が生じますね。

先生　でしょ。そしたら、魂全能説になるよね。

奈保子　なるほど。そうですね。だから、あらゆる体験の可能性があるんですね。

先生　そうなんだ。ただ、『神との対話』シリーズに登場する神様は、

その選択は魂自身があの世界やらです、というんですよ。

それはホントかなあ…という気もするんですけどね。

とにかく、私たちはこれまで地球に生まれただろう

何百億人以上の

人生と同じプロセスも歩めるし、未だかつてこの世に存在しなかった人生をも

すべて送れるといってもいいかもしれない。

奈保子　つまり、魂そのものに、全能性があって、あらゆるタイプの人生が

送れる潜在的可能性があるということですね。

先生　そう。それは、ES細胞に喩えればいいかもしれないね。

奈保子　受精後のまだ未分化な胚細胞ですね。

先生　そう。今、臓器再生で注目されているあれ。

将来、何にでもなれる可能性を秘めているからね。

奈保子　それじゃ、最初の問題に戻りますが、輪廻転生の目的

論的な意味はどうなるんでしょうか。

先生 厳密に言うと、目的論的な意味はないのかもしれないね。

ただし、『神との対話』では、個々の魂の進化のためにある、

というニュアンスのことが書いてあったような気がするけど。

それも、果たして、進化するのは何のため？ とさらに突っ込みたくなるよね。

とどのつまり完全な『神へ帰る』ため、とシリーズの最終巻では言ってるんですけど。

奈保子 目的論的な意味がないとすると、ただ在るため、ただ体験するため、

ということなんでしょうかね。

先生 さあ。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。

まさに、それこそ神の秘密「神秘」かもしれないね。

もつとも、これが人間の悟性の限界かもしれない。

4次元までしか認識できないのと同じようにね。

それ以上の次元があってもイメージできないものね。

奈保子 輪廻自体も自然科学的には実証されたわけではないですものね、今のところ…。

先生 そうだね。そう説明しないとありえない現象が確認されている、

という現実があるだけだからね。まだまだ、信仰に近い領域かもしれない。

でも、魂という言葉や概念と同様に、思想的にそれを仮定することで

今生の人生が豊かなものになれば、それは有意義ではあるでしょ。

奈保子　そうですね。飯田先生もそうおっしゃってますよね。

先生　そう。だからね、無限に人生が続くと思えば、人生は味わうためにある、

あるいは、楽しむためにある、経験するためにある、
と言ってもいいかもね。

奈保子　その中には、苦しみも含むでしょう。

先生　それを『神との対話』みたいに個々の魂が進化のために自分で選択しているという説と、

仏教のように因果報説とがあるよね。

奈保子　そうですね。人生にも目的論的な意味がない、

というのは哲学や宗教ではどう考えるのでしょうか。

先生　さあ…、私は哲学者でも宗教学者でもないから、わからないなあ…。

ただ、生命の表現型である生物はすべて等価だとすると、

高等生物の人間には存在目的があつて下等生物のバクテリアには目的がない、

とはどうしても思えませんね。

奈保子　人間の目的は、よい学校に入って、よい会社に勤め、

よい家庭、よい社会を形成するため、
なんて言ったらま

ったくの外れですものね。

先生　世間ではそれを目的みたいに勘違いしているけど、

そんなことは普遍性がないから、近視眼的に見た人生観に過ぎないでしょ。

生きる目的ではない。だから、試しに、家にいるゴキブリに聞いてみたらいいんだよ。

「あなたは何のために生きてるんですか？」

って（笑）。

奈保子　いい会社に入るため、ってば絶対に言いませんね（笑）。

先生　でしょ。きっと、

「おら、知らねえ……」

って言うんじゃない（笑）。

奈保子　そしたら、そもそも人生には目的なんかない、と
言っているんですか。

先生　そうかもしれないけど、生物学的には子孫を残す、種を
繁栄させる、

あるいは最近では、自分の遺伝子を残す、という考え方は
ありますよ。

奈保子　セルフイッシュ・ジーン　利己的遺伝子　ですね。

先生　そうそう。ドーキンスの提唱した……。

奈保子　魂理学的な人生観と生物学的な人生観では、ずいぶん
と乖離がありますね。

先生　そうだね。切り口の違いかな。

奈保子　魂理学的結論では、人生は味わうため、経験するため
にある、

ということに尽きるのでしょうか。

先生　今のところは、そうなるね。ただし、それは作業仮説
でもあって、

今後、よりよい論理が出てきたら変わるだろうけど。

奈保子　じゃ、わたし何を今生でしようかしら……。

先生　おっ！ スケールがでかいね（笑）。自分自身に、
「オレよ。」

いったいおまえは、何をしたいのかね？」

と問うてみるのはいいいね。

そして、できれば「こころ踊ること」「魂が振えること」
をやってみたらいいんで。

奈保子　好きなことなら、なんでもいいんですね。

先生　そういうことだね。ひとつのことに全人生をつぎ込んで
スペシャリストになるもよし、私みたいに色々とかじ
ったり首を突っ込んでみる

ジェネラリストになるもよしじゃないですか。

「この道一筋」というのが日本では評判がよくって勲章や褒賞の対象になるけど、

マルチ・チャンネルな生き方だっていいと思うけどな

あ。

ただし、広くて浅過ぎるのはどうかと思うけど。

奈保子 つまり、なんでもあり、ということですね。

先生 そのとおり。『神との対話』では、殺人すら、殺す方、殺される方の魂の経験としてある、
私はどうちも経験したくないけど。 といってるからね。

奈保子 ですね。それは、わたしもイヤです。

自分の神話づくり

奈保子　ここで、ちょっと話題を変えまして死と関連して、「自分の神話づくり」というテーマでお聞きしたいと思います。

先生　ほう。段々、仕切り方がうまくなってきたね（笑）。

奈保子　はい。調子ができました（笑）。

さて…、わたしたち現代人は「ほんとうの安心」を得ているのだろうか、という問題があります。所かまわず忙しそうにケータイをいじっている中高生や大人たちを見ていますと、なんだか一生懸命に時間の隙間を埋めているような強迫的行為にも思えるんです。そう言うわたし自身もケータイのお世話にはなっていますが…（笑）。まず、この世相というか現象について先生はどうお感じですか。

先生　そうね…。私はケータイを持ってませんからねえ。あんまり考えたこともないですけど、きつとあれなんじゃないですか。

奈保子　あれ、って言いますと？

先生　つまりそれですよ（笑）。

奈保子　漫才じゃないので、お応えを（笑）。

先生　はい。ごめんなさい。遊んでしまいました。

ケータイというのはここ最近世の中に登場してきたものだよね。人類が新たに手に入れたトウール（道具）だから、使い方がまだこ

なれていないんじゃないかと思うんですよ。テレビだって初めて家庭にやってきたときには、それこそ「テレビっ子」と呼ばれたテレビべったりの現象があっただけですね。

でも、テレビが一家に何台もある現代では、テレビに縛られている子なんてあまりいなくなっただけでしょ。つまり、テレビなんてたいしたものじゃないって分かったものもあるし、使い方がこなれてきたというか洗練されてきたとも言えるんじゃないかな。

奈保子　なるほど。じゃ、今まさに、中高生は「ケータイっ子」状態というわけですね。

先生　そうだね。もっとも、大人も夢中になってるけど…。

奈保子　人間の持つ、新しいものへの好奇心というのもあるのじゃないかな。

先生　そう。ノベルティ・シーキング (Novelty seeking) だね。新しいものの好きという意味で「ネオフィリア」という造語もあるよ。生物学者のライアル・ワトスンがそういう書名の本を書いてます。

奈保子　新しいことに夢中になるというのは、やはり基本的には楽しいことに没頭しているとは言えませんか。

先生　そうだね。楽しくなかったらやらないものね。

奈保子　楽しいことをやっているうちに、いつのまにかその虜になっちゃって、やらないではいられない状態になると、アディクション (Addiction / 依存症) のようになってしまいますよね。

先生　そのとおり。だから、私はそういう人たちを「ケー中」って呼んでいるんです。それから子どもたちにも「ケー中になつたらダメだぞ！」

と注意してます。

奈保子　ケータイ中毒っていうことですね。

先生　そう。今は、中毒とは言わないで依存症というようになってたけどね。

定義は簡単で、さつき奈保子ちゃんが言ったとおりで、それをしてないと不安になったりイライラする、落ちつかない、となるとケータイ依存症。テレビのCMで見たら日本人は平均一日二十回もメールチェックするんだって。

なんだが、やっぱりあなたが言ったように強迫的行為っぽいよね。ま…、ポップ心理学的にいろいろとその心理を分析しているのは見聞きしてますけどね。

奈保子　例えば、どんな風にでしょうか。

先生　えーと。一つは、他人とどこかでつながっていたい、という分離不安のような心理ね。現代人の孤独感とか疎外感とか、よく言われるでしょ。

それと、実存的な問題…つまり、自分とは何か、とか、自分の死、とかの本質的なことを考えたくないから、気を逸らすことに役立っているという考え方もあるね。

あと、私が思うのは、現代は操作社会なので、何かしら操作していないと安心できないのかもしれない。何もしないでボーッとしていると不安になるのかもしれないね。特に現代の青年期、壮年期の世代は。

奈保子 現代人は「ほんとうの安心」を得ているのだろうか、という問題にもどりますと、先生はどう思われますか？

先生 そうだねえ、私自身やうちの家族たちを見ていると、みんな不安げには見えないんだけど、「ほんとうの安心」を得ているかと言われると、はたしてどうかとは思いますよ。

たとえば、極端なはなし、自分が今、余命三ヶ月のガンを宣告されたなんていうとき、泰然自若として悟ったようには絶対なれないと思うもの。そういうのは「まさかの時」というんでしょうけど。そういう極限状態でなければ、日常は「適度な安心」感があればいいんですね。

でも、実際問題として、人生には突然、「まさかの時」が訪れることがあるんですね。だから、できれば、普段からそういう時のために心の準備というか心を鍛えておかなきゃならないんでしょうが、現代人はあまりそういうトレーニングはやってないようですね。

それと、将来に漠然とした不安を抱いている人たちは、青少年にも中高年にもいるんじゃないかしら。職があるかとか、老後は大丈夫か…と、いろんな不安要素があるでしょ。

奈保子 病気の心配もありますしね…。

先生 そう。

民俗学者の柳田國男が、『先祖の話』という本のなかで書いているんですが、近所に住む大工さんで会うとなぜか心が落ち着く人がいたというんです。

それで、ある時、その人に

「あなたはいつも落ち着いていてこちらもとても気持ちがいいんですが、どうしてそう落ち着いていられるんですか」

と尋ねたんだね。そしたら

「私が落ち着いていられるのは、死んだら先祖になって奉られると

思っているからなんです。行き先がはっきりしているから、金がなくなるのが、病気をしようが、心配していないんです」

と言ったそうです。

奈保子 はあー。それって…

先生 きっと、その人なりの物語というか個人の神話でもあるんでしょうね。死後のことを組み入れて現在を生きているから、ちっともブレないのかもしれない。

奈保子 なるほど。まさに、個人の神話を生きているんですね。

先生 そうなんだよ。人間、生きている間はいろいろとブレるでしょう。でも、死後生について確固とした考え方を持っていると、本来的な安心感が得られるんだね。

深層心理学者のユングは

「見知らぬ土地に行くのに人は地図を用意するように、見知らぬ死後についても何らかの準備をすれば安心するだろう」と言っているんだ。

奈保子 なるほど。その通りですね。ただ、浮薄なスピリチュアルな知識だけでは足りないようには感じますけど…。

先生 そうだね。やっぱり、「生命」や「宇宙」「神」「魂」ということについてある程度は知っていたいよね。

奈保子 でも一方で、天国がある、って強く信じるだけでも安心する人もいるでしょうけどね。

先生 そりゃいるでしょう。信仰の力でね。信じる、というのは

すごいことなんですよ。一つの力になる。ただ、妄信や狂信は困るけどね。

正しい信仰を持つている人はあまり死後の心配はないんじゃないですか。神様がなんとかしてくれるから。宗教と接点のない多くの人は、それに代わる何か個人の神話を見つけ出さないと安心できないんですよ。それで、ついお金にしがみついてしまったり、物に囚われたりして、益々安心から遠のいていく。

奈保子 宗教じゃないとすると、現代の科学を否定しない範囲内で、合理的知見と矛盾しない世界観というか…宇宙観、生命観のようなものを確立する必要があるんじゃないでしょうか。

先生 そう思いますよ。なにやら、難しそうですね。

アインシュタインはね

「科学のない宗教は盲目だが、宗教のない科学も盲目である」
って、言っただけですよ。

奈保子 なるほど、名言ですね。

先生 これは、アインシュタインが自ら発見した物理原理で作られた核爆弾が広島・長崎で使用されたことを愁いて発した言葉かもしれないですね。宗教心をもたずに科学だけ発展させていくと、あのような悲劇を生むんです。

人は科学だけでは助からないが、宗教だけでも助からない場合があると思うんです。まっとうな宗教はいいとして、とくに、迷信、妄信、狂信というカルト的宗教は近年、いろんな悲劇的事件を起こしているでしょう。日本でのオウム事件とか、海外でも集団自殺とかいろいろ起きています。

科学というのは実証可能で、普遍性、再現性があって論理的筋道がきちんとしている合理的精神の代表ですね。いっぽう、宗教とい

うのは、目に見えない神様や死後の世界という実証不可能なもの、どの民族にも普遍的ではないものを扱うわけですから、科学的精神とは相反する部分では非合理的なものといえるでしょう。

ですから破壊的思想のリーダーに盲従したり、集団心理で催眠状態になって合理的精神を失って狂奔・暴走することもあるんです。

一方では、人間を含めて自然界の万物は不思議な存在だから、科学ではまだまだ何も解かっていないに等しい。さっきも言ったように、宇宙のことは、まだ4%しか解かっていない。ということは何にも解かっていないようなものでしょう。生命だって0からは作れないし、癌の確実な治療法さえまだ解明されていない。

科学者自身でさえ、こないだ日本であつた皆既日食を見ると何故か感動する、という科学的には証明できないような心的作用が起こるんです。あるいは、科学者が家族を愛するとか、身内を亡くして哀しむという、科学とは次元の異なることが実際に起こる。

アインシュタインの言葉には含蓄があつて、科学と宗教は「車の両輪」のようなものかもしれないと思いませんか。

個人の神話から、ちよつと脱線しちゃったかな…。

奈保子 いいえ。つながりはあると思います。個人にもういちど帰ると、私たちが助かるのには「物語」が必要であると河合隼雄先生はよくおっしゃってましたね。

先生 そうですね。私はそれを

いちばん強く感じたのは、和歌山であつた毒カレー事件のときに、亡くなつた子どもさんのお母さんが書いた童話を読んだときなんです。

『彼岸花』

ある年の七月。

十歳の少年の命の灯が消え、ひとつの魂が生まれました。
短い命から生まれた小さな小さな魂でした。

その小さな魂は、母が恋しくて、神様に、もう一度だけ母に会わせてほしい、と頼みました。

神様は、その純真無垢な魂を不憫に思い、願いを聞き入れてくれました。

そして、神様はこう言われました。

「一日だけ、おまえを人間界にもどしてあげよう。
ただし、人間の姿ではもどれない。

母が、おまえの姿を見つけ、母の声を聞くことが出来たなら、いつか再び、親子として人間界に生まれ変わることを許そう。

しかし、母の声を聞くことが出来なかった時には、魂は消えてなくなってしまうが、それでもよいか?…」

小さな魂は、九月半ば、母との思い出深い彼岸花の姿をかりて、母の住む家の近くの土手に、ひっそりと咲きました。

なつかしい家の窓には、悲しげに外を眺める母の姿がありました。
精一杯、健気に咲く一本の紅い彼岸花に目がとまったのでしょう。
しばらくすると、母は引き寄せられるかのように、ゆっくりと土手の方に近づいてきました。

そして、母は、彼岸花に顔を近づけ、語りかけました。

「もう、彼岸花の季節になったのね…」。

ひろ君は、いつもお母さんのためにこのお花を摘んでくれたよね。

ありがとう…」

母の目から涙がこぼれ落ち、声にならない声をふりしぼって言いました。

「ひろ君。

おかえりなさい…」

そう言って、花をやさしく手で包み込みました。

なつかしい母の声とぬくもりでした。

その母のやさしい声を聞くことができた瞬間、

「お母さん。」

ただいまッ！

いつかまた、きっと、お母さんの子どもに生まれてくるからね。

ありがとう。

お母さん！」

彼岸花は、母の言葉と、いく粒もの涙を花びらでうけとめ、ひとすじの光となり、空に昇っていきました。

母は、空を見上げ、いつまでも祈り続けていました。

先生 夏祭りに遊びに出かけた子が、なぜ突然、死んで帰ってこなくてはいらないのか……。まったくもって不条理な話ですよ。腑に落ちないこと、この上ありません。

このお母さんは、どれほど動転され悲しみのどん底に叩きつけられたことか。きっと何日も寝込まれたのではないかと思います。

それでも、いつまでも立ち直れないままでは子どもが心配するだろうからと、氣力を振り絞って息子さんの机にしがみついてこの物語を書いたそうです。

奈保子 『彼岸花』というタイトルが、何となく、お彼岸を思い出させますね。わが家に靈魂が帰ってくる……という。

先生 そうだね。それはどこかに意図したんじゃないですか。祈るような気持ちで。

彼岸というのは、この世である「此岸」の彼方で、三途の川をはさんだ向こう岸のことですよ。

（あの子は、今、あっちにいるんだ……。でも、いつかまた、会えるんだ……）

という、母親の切なる思いが伝わってきます。

このお母さんは、突然の「まさかの出来事」を、何とかして自分の腑に落とそうと、一生懸命に、それこそ血を絞るかのようにしてこの物語を書いたと思うんですね。

それも、「神様」とか「あの世」とか「魂」とか「生まれ変わり」ということじゃないと、もう収まりがつかなかったんです。

奈保子 毒カレーを食べたのが「ひろ君」の死因である、というように「科学の知」ではダメなんですね。

先生 そうなんです。それこそ、「神話の知」でなければ癒されなことです。そして、それは自ら「物語る」ということによって癒されるわけです。

奈保子 ほんとうに、これは「魂」の叫びのような物語ですね。

先生 そう思います。このお母さんの「自分の神話」だと思いますよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2943j/>

死の魂理学

2010年10月10日07時02分発行